

平成 29 年 6 月 13 日現在

機関番号：23901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25360017

研究課題名(和文) 認知症介護が家族関係に与える影響～メキシコの拡大家族の凝集性は保たれるのか～

研究課題名(英文) The influence of dementia care on family relations: The care burden and the cohesion of the extended family in Mexico

研究代表者

松岡 広子 (MATSUOKA, Hiroko)

愛知県立大学・看護学部・准教授

研究者番号：60249274

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：社会保障制度が未発達である開発途上国では、認知症高齢者の介護をその家族がほぼ全面的に担う。認知症の行動・心理症状は介護者に大きな精神的負担をもたらすために、核家族だけでなく、拡大家族の多くの構成員が介護に協力するのが理想的である。メキシコの場合、認知症介護に対する拡大家族の反応は画一的なものではなく、非常に様々であった。危機を乗り越えるために結束を強めた家族もあれば、介護者を孤立させてしまう家族もあった。介護に協力してくれる人とそうでない人とに分断された家族もあった。認知症介護に対して、拡大家族における助け合いは必ずしも期待できるものではなかった。

研究成果の概要(英文)：In the developing countries where a social security system is underdeveloped, the family bears almost all the care of elderly person with dementia. It is ideal that not only members of a nuclear family but also more members of an extended family cooperate in the care, because behavioral and psychological symptoms of dementia bring a caregiver a heavy mental burden. In the case of Mexico, the extended family's reaction to dementia care was not uniform, and was very various. In order to overcome the crisis, some families strengthened union, and some families isolated the caregiver. Other families split into two factions: the members who cooperated in the care and those who did not. The mutual help in an extended family was not necessarily expected for dementia care.

研究分野：老年保健福祉政策

キーワード：メキシコ 認知症 家族 介護 高齢者

1. 研究開始当初の背景

先進国だけではなく、開発途上国でも人口の高齢化が急速に進行して、それに伴い認知症高齢者の増加が見込まれている。メキシコもその例外ではない。同国では医療や年金といった高齢者を支える公的な社会保障制度が貧弱であり、その代替として拡大家族間の助け合いが重要な役割を担う。

メキシコ人にとって家族は何よりも大切なものであり、例えば、失業といった経済的な危機や子育てなどにおいて、頼りになるのは同居、別居を問わず拡大家族間の助け合いである。メキシコ人の多くが休日には必ず、近住の拡大家族が顔を合わせる機会を設けている。しかし、家族を取り巻く環境は急速に変化している。若年層の都市部や米国への移住、女性の労働市場への参入、少子化などは、家族が高齢者を介護する余力を縮小させている。

以上のような状況の下で、認知症介護は家族関係を崩壊させる危険性をはらんでいる。主な認知症にはアルツハイマー病、血管性認知症、レビー小体型認知症、前頭側頭型認知症などがあり、それらの治療法は確立されておらず、病状は年々着実に進行する。そして、認知機能の低下以外に、ときにはそれよりも目立って、妄想、幻覚、興奮・攻撃性、抑うつ、不安、多幸、アパシー、脱抑制、易刺激性・動揺、異常行動、睡眠障害、食行動変化といった行動・心理症状が多くの場合に現れる。とりわけ、全く容赦のない暴言や暴力、絶え間のない徘徊、介護者を波状攻撃する物盗られ妄想、相手を選ばない性的逸脱行為、弄便食糞などは、実際に関わった者には大変な苦悩を、周囲の者には誤解と猜疑心を生じさせる。認知症は、患者への虐待に容易に至るほど大きな感情的負担をしばしば介護者や家族にもたらす。

2. 研究の目的

本研究の目的はメキシコを対象として、認知症介護が家族関係に与える影響を明らかにすることである。より具体的には、介護の負担が拡大家族の凝集性を喪失させるのか、あるいは危機的状況がむしろその凝集性を高めるのかを検証することである。前者であれば、高齢者の精神疾患が拡大家族のあり方に変更を迫ることを示すだろう。後者であれば、メキシコにおける拡大家族間の結びつきの強さを表すことになるだろう。

3. 研究の方法

メキシコにおいて、認知症患者とその家族を支援する主導的な役割を果たしているのは、公的機関ではなく、少数の民間の非営利団体である。それらの団体が運営する認知症患者とその家族のための会(家族会)や認知症専門デイサービスの利用者に対して、質問紙調査を実施した。主介護者の属性、患者の日常生活動作や認知症の行動・心理症状など

の状況、同居・別居の拡大家族の構成、認知症介護がもたらす家族の凝集性への影響の度合いに関して、質問項目を設定した。また、介護の負担や認知症介護をきっかけとした家族関係の変化にまつわる様々なエピソードについて、自由に記述してもらう方法をとった。

調査にあたっては、研究者の所属機関の研究倫理審査委員会の承認を得た。調査の対象者には、研究の目的と方法、研究への参加の自由、プライバシーの保護とデータの管理について、スペイン語の文書を配布して説明をした上で、同意が得られた場合に限り質問紙への回答をお願いした。

4. 研究成果

主介護者の年齢、性別、患者との続柄、就労状況、学歴、主観的経済状況、利用中の介護サービス、患者の年齢、認知症の診断名、要介護期間、日常生活動作、認知症の行動・心理症状といった項目と、拡大家族間の凝集性の変化との関連について、統計学的分析では明確な結果は得られなかった。この結果は、認知症介護と家族関係の変化については個別性が高く、その一般化は困難であるということを示している。例えば、認知症の行動・心理症状とそれに伴う介護者の精神的負担への恐れが、患者との接触や介護への協力を躊躇させて、拡大家族間の凝集性を低下させることも予想されたが、認知症の行動・心理症状と拡大家族間の凝集性の変化とに明確な関連は見出せなかった。

新興国とも呼称されるメキシコにおいて、社会はかつての先進国以上に急速に変化しており、家族のあり方も非常に多様化しつつあることがその背景にあると考えられる。つまり、結束を最重要視する家族から個人の意志に圧倒される家族まで様々であるということである。自由記述回答を分析した結果、認知症患者を取り巻く、病前と病後の家族の多様な関係性が明らかとなった。そして、拡大家族における助け合いは、認知症介護に対する当たり前の反応ではなかった。これらの結果は、メキシコの拡大家族に関する従来の画一的な印象を覆すものであるといえる。統計学的分析には反映されにくい自由記述の内容の一部を以下にいくつか紹介する。

(1) 前頭側頭型認知症の夫を介護する妻

介護期間：5年以上。

介護で負担と感じていること：アパシーと食欲不振。

認知症介護の家族関係への影響について：同居している娘の夫が患者に嫌悪感を持つようになり食事を共にしない。家族の結束においては、義理の親子関係と実の親子関係とに違いがある。

(2) アルツハイマー病の実母を介護する娘

介護期間：5年以上。

介護で負担と感じていること：ひっきりなしに、服や靴をクローゼットから取り出して、床にばらまいたり、引き出しに隠したりすることや、指示をしてもなかなか実行することができないこと。

認知症介護の家族関係への影響について：認知症の診断を母(患者)が受けて以来、息子や娘、孫たちは母から離れていった。母と同居している娘(介護者)とその兄弟姉妹との関係は月に1回か2回の電話に過ぎない。認知症の介護が始まってから、家族のまとまりなど存在しない。

(3) 認知症の実母を介護する娘

介護期間：5年以上。

介護で負担と感じていること：幾晩も続けて眠らず、夜間に失禁があり、オムツを脱ぎ、シーツ、毛布、床を汚したり、服を完全に脱ぎ捨てたり、こちらが気付かないと一晩中失禁で濡れたベッドにいるといったこと。

認知症介護の家族関係への影響について：別居の親族は、母(患者)の介護に関わっていないために、同居している娘(介護者)や孫との関係に軋轢や問題を有していない。娘と孫は、母を一瞬たりともひとりにしておけないために、外出を楽しめない。母と一緒に外出しても、完全に依存してくるために、行動は非常に限られる。孫の大学生活を守るために、娘が母を寝かしつけるまで介護の大部分を担っている。母の変化のせいで、孫の幼少期は普通ではなかった。母の症状に皆、混乱したが、現在は孫が普通の生活ができるように娘は努めている。

(4) アルツハイマー病の妻を介護する夫

介護期間：1年以上3年未満。

介護で負担と感じていること：特にない。

認知症介護の家族関係への影響について：夫(介護者)の不満は、妻(患者)の身の回りの介護の責任が平等に分担されてこなかったことにある。しかし、家族が集まったときには皆、できる限りの配慮を妻に惜しまない。義理の娘は、過去に自らの病気のことで夫の両親(患者と介護者)の世話になり、現在はやるべき仕事もあり、立場的にとても複雑であると感じている。

(5) アルツハイマー病の夫を介護する妻

介護期間：1年以上3年未満。

介護で負担と感じていること：患者が介護者を眠らせてくれない、とても怒りっぽい、時間に関係なくいつも何かを食べたがる、おむつをしてくれない、患者の服を洗濯して食事を与えることで時間が過ぎてしまう。

認知症介護の家族関係への影響について：妻(介護者)は夫(患者)の介護の責任をすべて抱え込んで、ときどき孤独であると感じる。しかし、子供たちが母親(介護者)の健康を心配して、水曜日に交代で介護をしてくれたり、土曜日に家政婦を手配してくれ

たりしている。

(6) 血管性認知症の実母を介護する娘

介護期間：1年以上3年未満。

介護で負担と感じていること：日々の介護のほかに特に、同じ質問に何度も何度も大変我慢をして応えること。

認知症介護の家族関係への影響について：父(患者の夫)も同居しているが、その父と(介護者の)兄弟姉妹との関係、つまり父子関係が良くなく、父がいるという理由で、彼らは母(患者)を訪ねてこない。電話も掛けてこない。父は母を介護せず、そのため、同居している娘(介護者)が100%母の世話をしている。遠方に別宅を有しているが、(娘と母がそこに行き)父がそこに行かないときに、(介護者の)兄弟姉妹が母を訪ねる。しかし、それも2、3ヶ月に一度のことである。

(7) アルツハイマー病の実母を介護する娘

介護期間：1年以上3年未満。

介護で負担と感じていること：夜に眠らないこと。

認知症介護の家族関係への影響について：家族がまとまった。家族が母(患者)とより生活を共にすることになり、(患者の)子供たちとの外出も増えて、母はより世話をされるようになった。

(8) 認知症の実母を介護する娘

介護期間：5年以上。

介護で負担と感じていること：ない。

認知症介護の家族関係への影響について：長期間の(家族での)外出ができなくなった。娘(介護者)とその家族との結びつきが強まった。

(9) 混合型認知症の実父を介護する娘

介護期間：3年以上5年未満。

介護で負担と感じていること：入浴や歩行。変形性膝関節症がある。

認知症介護の家族関係への影響について：(別居している家族は)何も関与してこない。ただ、父(患者)がどんな様子か知るためにときどき話す程度である。金銭的にも現物的にも決して援助してくれない。いつも助けられない言い訳ばかりする。しかし、会うときは皆、礼節さがあり、父に対する敬意がある。

(10) アルツハイマー病の実母を介護する娘

介護期間：1年以上3年未満。

介護で負担と感じていること：患者に幻覚があって、介護者が患者をコントロールできないこと。排泄に失敗したときに着替えをさせなければならないこと。

認知症介護の家族関係への影響について：一人娘が母の介護をしているが、母が病気であると親族が知ると、みんな離れていった。以前は母(患者)の兄弟姉妹は母と電話

で話したものだが、娘（介護者）が（病気であるという）知らせを彼らにすると、もう電話をしてこなくなった。娘は母にできる限りのすべてのことをやっている。すべての愛情を与えている。娘の夫があらゆる面で娘を支えて、娘の右腕になってくれて、娘を元気づけてくれる。デイサービスの職員のお世話になっている。彼らは母を受け入れて、大変な愛情を持って母を扱ってくれる。母もいつも楽しんでおり、職員のことを気に入っており、娘もよい人々の手に母をまかせることができて、とても満足している。

（11）アルツハイマー病の実母を介護する娘
介護期間：3年以上5年未満。

介護で負担と感じていること：攻撃性と無為。

認知症介護の家族関係への影響について：病気は生活を変えたが、家族は結束している。病気は家族関係を強固にした。家族は家において、母親（患者）と過ごす時間が多くなった。

（12）血管性認知症の妻を介護する夫
介護期間：不明。

介護で負担と感じていること：患者の行動の遅さ。

認知症介護の家族関係への影響について：時折、妻（患者）の扱い方をめぐって、夫（介護者）と近くに住む子供たちとの間で意見の相違がある。子供たちの主張によれば、夫が妻をまるで健常者のように接して、少し短絡的である。他方、子供たちが毎日、とても頻繁にこの夫妻（患者と介護者）を訪問することで、家族はより団結している。夫妻を診療のために病院に連れて行ったり、夫妻のために食事を用意したり、身の回りの世話をし、介護の負担の軽減に努めている。

（13）アルツハイマー病の実母を介護する息子

介護期間：3年以上5年未満。

介護で負担と感じていること：家から出てきたがる、存在しない人や過去の人のことを尋ねる、見つけられないものを探そうとする、睡眠の中断、多動状態で目覚める。

認知症介護の家族関係への影響について：病気のせいで、母（患者）の兄弟姉妹は母を頻繁に訪ねなくなり、母を訪ねにやってきたときも、母の様子を尋ねるだけで、母の方に視線を向けようとしめない。母にどのように対応して良いかわからず、母のことをほとんど気に留めない。母の機嫌の良いときは問題がない。困難な状況のとき、母と同居している二人の息子が介護を交代でやることで、ストレスをなんとかコントロールできている。

（14）アルツハイマー病の妻を介護する夫
介護期間：3年以上5年未満。

介護で負担と感じていること：妻（患者）が怪我をしないよう行動に注意を払うこと。

認知症介護の家族関係への影響について：近くに住んでいる息子は本当にめったに訪問に来ない。娘は経済的に援助をしてくれる。近くに来たときは気を遣ってくれる。遠くに住んでいることが残念だ。

家族介護者の記述を通して発見できることは、認知症介護は病前の家族の関係性を本質的に変化させるものではなく、その特徴を表面化させるに過ぎないかもしれないということである。その点において、家族の歴史が重要である。また、認知症介護は拡大家族間の助け合いの対象になりにくいと思われる。それは子育てや一時的な金銭援助とは異なり、改善しない退行性を伴い、長期にわたる精神的・経済的負担を強いるからだろう。

メキシコにおいては、高齢者の介護は家族が担うべきという考え方が一般的であるが、それは積極的な意味合いだけではなく、社会サービスがないから仕方なく家族が看るという側面もある。特に都市部においては、同居する家族の形態は拡大家族から核家族という流れがあり、拡大家族は近住である場合が多いが、独居している親が高齢化して、子が引き取り同居するという狭義の拡大家族の復活もみられる。

本研究での調査の対象者は、わが国のような介護保険サービスがないメキシコにおいて、認知症専門デイサービスを利用したり、認知症患者とその家族のための会（家族会）に参加したりする人々であり、その多くは社会経済的に比較的恵まれた人々であったといえる。そのような人々の家族は核家族化が進行しており、別居する家族からの直接的な支援を得にくい状況にある。他方、患者を施設に入所させる金銭を有していても、肉親の面倒はその家族が看るべきというメキシコの伝統的価値観に阻まれてそれを実行できないというジレンマにあるといえる。そして、その伝統的価値観に多くの人々が従っているために、需要がないという理由で介護の社会サービスも発展していない。実際、メキシコにおける高齢者入所施設は一般に身寄りのない人々のためのものである。

今後の課題としては、認知症介護についての社会経済的に恵まれない人々に対する調査があげられる。開発途上国における貧しい人々の多くは、病的な認知機能の低下を自然老化と捉える傾向が強く、専門病院で認知症の診断を受けることもなく、社会サービスを利用することもなく、家族内だけで介護されていると考えられる。医療を受ける機会が少ない貧しい認知症高齢者は、豊かな認知症高齢者よりも短命であり、家族の介護も長期にわたらないかもしれない。治療をしても認知症が完治できないのであれば、そういった人々が不幸であるとは決め付けられない。家

族介護者の記述が示す様々な苦勞を率直に受け止めると、病前の家族関係がどうであれ、介護の長期化が患者や家族を幸福にするとは考えにくいからである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計3件)

松岡広子、山口英彦、認知症介護が同居家族の関係に及ぼす影響：メキシコシティの家族介護者に対する調査から(第2報)、第31回日本老年精神医学会、2016年6月23日・24日、金沢歌劇座(石川県・金沢市)

松岡広子、山口英彦、認知症の行動・心理症状と家族・親族関係の変化：メキシコシティの家族介護者に対する調査から、第30回日本老年精神医学会、2015年6月13日・14日、パシフィコ横浜(神奈川県・横浜市)

松岡広子、メキシコにおける認知症ケア支援：民間団体の主導と家族中心主義、第9回日本応用老年学会大会、2014年10月26日、桜美林大学プラネット淵野辺キャンパス(神奈川県・相模原市)

6. 研究組織

(1)研究代表者

松岡 広子(MATSUOKA, Hiroko)
愛知県立大学・看護学部・准教授
研究者番号：60249274

(2)研究協力者

山口 英彦(YAMAGUCHI, Hidehiko)
市民団体トランスパシフィコ・代表